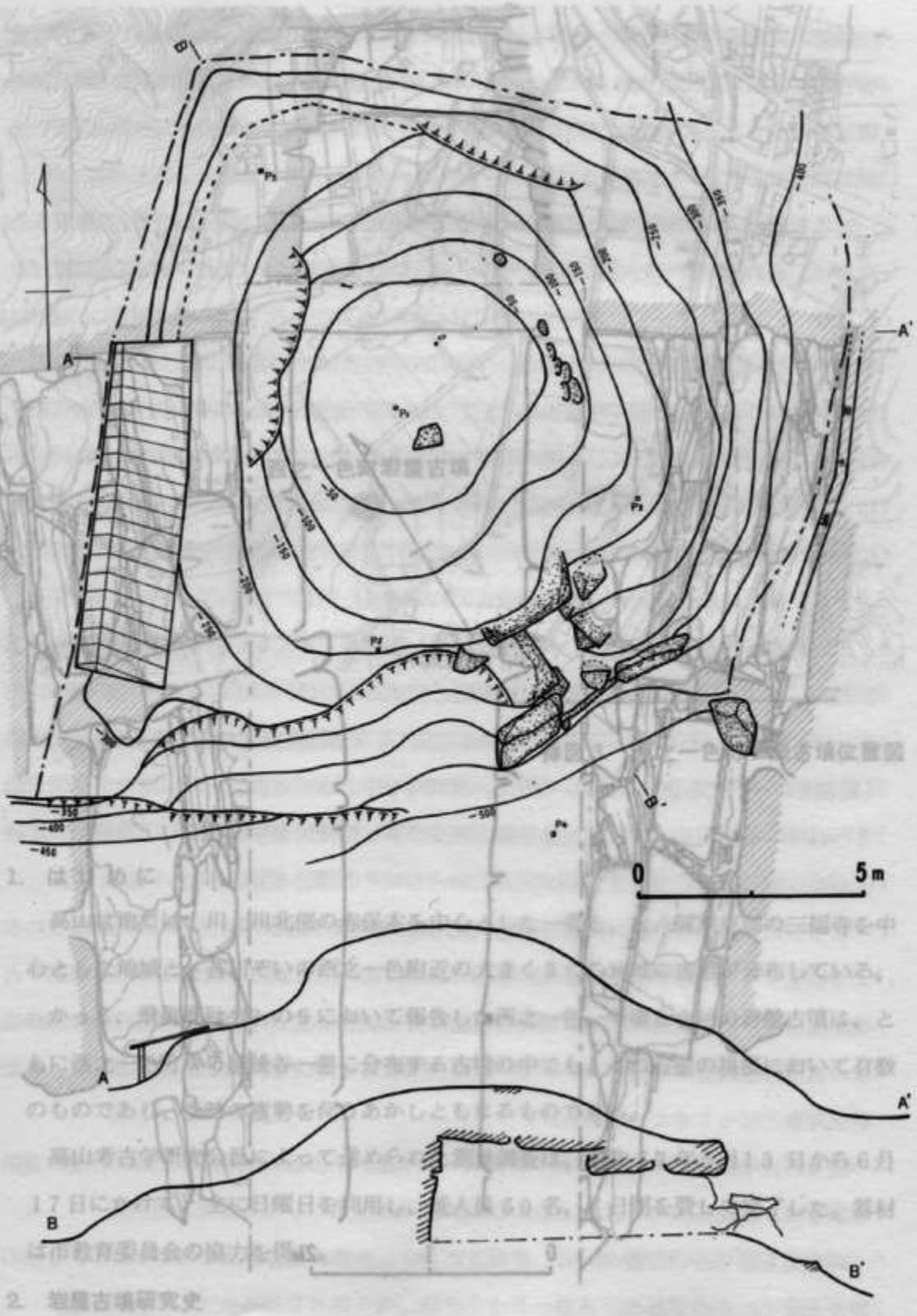
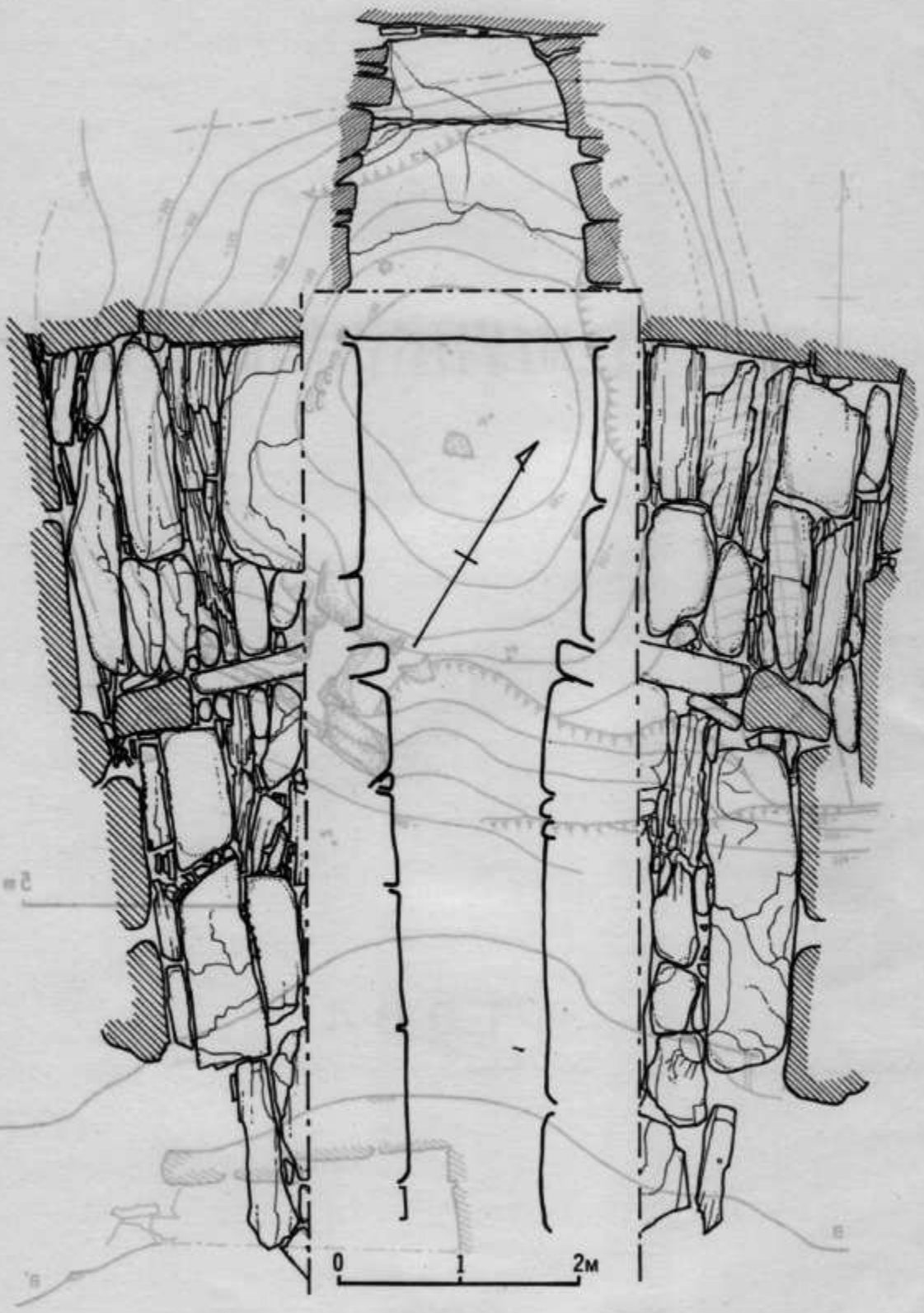
西之一色町岩屋古墳調査報告

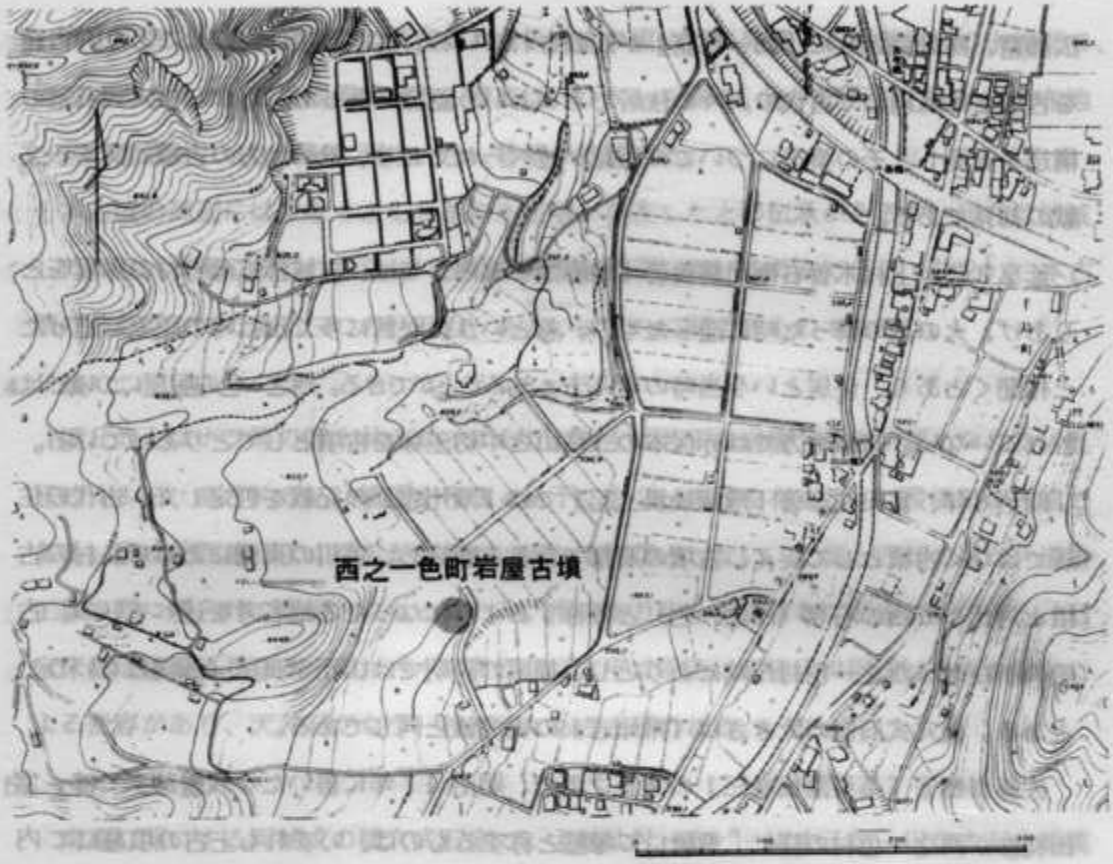
1984



挿図 1. 西之一色町岩屋古墳墳丘平面図及び断面図



挿図 2.　西之一色町岩屋古墳石室実測図



挿図 3.　西之一色町岩屋古墳位置図

1. はじめに

高山盆地では、川上川北部の赤保木を中心とした一帯と、大八賀川東部の三福寺を中心とした地域と、苔川ぞいの西之一色附近の大きく３つの地域に古墳が分布している。

かって、飛騨春秋２９の９において報告した西之一色一号墳と今回の岩屋古墳は、ともに西之一色町から越後谷一帯に分布する古墳の中でも、その石室の規模において有数のものであり、当時の権勢を伺うあかしともなるものである。

高山考古学研究会員によって進められた測量調査は、昭和５９年５月１３日から６月１７日にかけて、主に日曜日を利用し、延人員５０名、７日間を費して完了した。器材は市教育委員会の協力を得た。

2. 岩屋古墳研究史

延享２年（１７４４）、長谷川忠崇によって編輯された『飛州志』巻第八の古窟の項で

広瀬窟、高野窟と共に「西一色窟」が記載されている。古墳の項は別記してあり、古窟を古墳とは区別して古代の人々の住居であるという認識であった。しかし横穴式石室の構造を実測し、その築造についての所見が述べられており、飛騨地方の古墳に関する文献の初見である。

延享3年、上村木曽右衛門満義著『飛騨国中案内』では、吉城郡広瀬町村の塚屋をとりあげ、火の雨の降った時に造ったもの、恙(つつが)という虫が世に多く出た時の隠家に造ったと相聞くとあり、住居という当時の考え方を知ることができる。西之一色の塚屋については触れていない。高山地方では赤保木の三墓山と中切王塚を古墳としてとりあげている。

明治6年、富田礼彦著『飛騨後風土記』では『飛州志』の記載を否定して、古代の住居ではなく古墳として捉え、古墳の石槨であると断定し、苔川の東側にある千島村の古墳と対比して西の石槨(いしき)（西之一色）と呼称するようになったと地名考を述べている。古墳の所在地は西之一色村州崎にありとし、挿図の説明では山下字長尾（洲崎ともいう）とある。横穴式石室の大きさは『飛州志』の実測値と同じである。

佐藤泰郷著『菫菜園集巻三』の考証之部で、明治17年に書いた「穴居跡」では、富田礼彦が西之一色村の條に「飛騨にて塚屋と称するものは、いずれも上古の墳墓にて内の岩構えは石城（石槨）」と唱えているのを否定し、石槨（現在での竪穴式石室）と穴居跡（現在での横穴式石室）を区別して捉え、国府町を中心とした古墳と穴居跡の実測図が添えられている。明治19年に佐藤泰郷と親交のあった神田孝平が来飛し、泰郷が穴居跡とした広瀬鴻峠口古墳の玄室を横穴式石室としてその構造を報告した。（註1）。

こうした経過を経て横穴式石室と竪穴式石室が、古墳の型式の違いであると認識されるように至ったのであり、その後昭和初期の犬塚行蔵の大八賀村三福寺における四基の古墳発掘研究、立田長太郎の上広瀬町古墳群の分布調査研究、角竹喜登の精力的な飛騨地域の古墳分布調査が進められる中で、岩屋古墳は常に高山を代表する古墳として、その研究対象となってきたのである。

幾多の古墳が崩壊・消滅していく中で、本古墳はよくその形態をとどめ、石室の立派な事では、現在高山市周辺では並ぶものがない。

研究史上最も古い古墳であるが、近代以降、精密測量が実施されていないので、今回の調査となったものである。

3. 位　　置

高山市西之一色町岩屋前に所在する。松倉山の東山麓に発達する崖錐地形の末端部で、周辺は雑木林ないし果樹園である。標高は 610 mを測る。北方200 mに廻り 洞散布地・善応寺遺跡、400 mに西之一色一号墳が位置する。

本古墳の周辺には少なくとも2基の小古墳が存在したとの伝承があるが、現在は消滅しており、石室に使われたらしい巨石が幾つか散在しているのみである（註2）。本古墳の前部に立ててある三つの巨石も、あるいはそれに関するものであろう。

4. 墳　丘

墳丘の上はナラ等の雑木林となっており、封土は若干の崩壊・流出が認められる。直径約18 m、高さ約5 m、墳頂から2.4 m下に巾2 mの段を有する、二段構築の円墳である。段は北西部によく残るが東側では流れて判然としない。北側と西側の裾は、道路工事の際に削られて直線的になっている。南方より少し東にずれて石室が開口する。石室床面は墳頂より3.5 mのレベルにありほぼ水平である。石室入口附近は後世の修復による変容があり、天井石がもう一枚あったものと思われる。（註3）。

5. 石　室

南東に開口する両袖式の横穴式石室で、主軸はN－31°－Wを示す。現存の石室規模は全長7.5 mで、最大巾は奥壁部にあり2.0 m、袖石間が最も狭く1.4 mである。（註4）

玄　室　巾2.0 m、奥行2.5 m、高さ2.2 m。正面（北壁）は2枚の平担な石が2段に積まれる。右壁（東壁）は横長の石でほぼ5段に積まれ、空間は板状の石で埋められる。左壁（西壁）は巾2 mの巨大な石をベースにほぼ4段で構成されるが、2段目は圧力で変形している。両壁は天井に向って持送り積みがなされ、天井石は巨大な板石2枚である。天井中央に約10 cmの隙間があり封土がのぞく。

羨道との境は両側に縦位に巾30 cmの細長い袖石が立てられ、その上に横に長方形の巨石が載せられて門の様に作られる。この部分の高さは0.9 mで一番低くなっている。

羨　道　最大1.3 m、入口近くで1.1 m、高さ1.4 m、長さは現長で約4.7 mである。羨門部は変容があって原形は不明である。右壁は2.7×0.7 mの巨大な石を中心にほぼ3段で構成される。左壁は4段で、うち2個の石に切石加工の痕がみられる。天井石は2枚残るが、恐らくもう一枚あったと思われ、古墳脇に立てかけてある石がそれと考えられる。

なお石質は全て松倉山に産する流紋岩（通称松倉石）で、近くで容易に得ることが出来る。

6. 遺　物

本古墳は既に1.700年代には開口していた記録があり、盗掘された時期はよりさかのぼるであろう。遺物の出土した記録はなく、従って本古墳の出土遺物は皆目不明である。

近接する善応寺遺跡では須恵器の表採資料があるが、いずれも7世紀後半から8世紀代の所産であり（註5）、本古墳との関連はないと思われる。

7. 時　期

遺物による時期判定が望めない現状においては、石室形態の比較に依らざるを得ないが、同様の巨石墳は最も近い西之一色一号墳に見られる（註6）。飛騨地方においては鴻峠口古墳（前方後円墳・国府町）、高野水上古墳（円墳・古川町）等が類例としてある。

本古墳の玄室は高さ2.2mに及び、かなり高い部類に属する。また石材の一部に切石加工が見られるのは注目すべきである。

類似する他古墳の出土遺物と本古墳の石室の特徴等を考えあわせると、いわゆる第6期型巨石墳の後出形態に属し、時期はほぼ7世紀初頭に位置づけるのが妥当と思われる。

8. おわりに

本古墳は、その規模・保存状態から言っても高山市第1級の古墳であり、文化財価値は測り知れないものがある。その保存のためにも早急に史跡としての指定が強く望まれるのである。

調査に際しては多くの方々に御協力を得た事を明記し、謝意にかえるものである。

調査参加者氏名

考古学研究会

寺地茂雄	石原哲彌	藤本健三	垣水富郎
野村宗作	中嶋勇	丸山和雄	岩田修
吉朝則富	上野潔	直井隆次	菅田一衛
西二夫	坂下克巳	中田敬三	林雅一
今井和雄	伊藤浩子	中島和之	山腰哲也

布 勢 四 郎

市 教 委

社 会 教 育 課

一　　般

住　　寿美子　　岩 花 秀 明　　小屋垣内　　進

脚　註

註1.　東京人類学会雑誌第3巻20号　明治20年

註2.　本古墳より50m南に天井石用の巨石2枚、更に50m南に石室用の石が約10個集合している。

註3.　昭和27年の高山市史上巻第1章古代本文中の写真によれば、既に2枚の巨石が入口に立てかけてある。いずれか1枚が本古墳の天井石であった可能性が高い。その後昭和40年代の整備で別に1個の巨石が立てられ、羨門下の横位の踏台石が加えられた可能性もある。なお、角竹喜登氏は本古墳を西之一色古墳と呼称し、岩屋古墳とは呼んでいない。

註4.　角竹氏による計測では、西之一色古墳石槨3間1尺となっており5.7mしかないが、これは現在残る天井石までの長さを測ったからであろう。

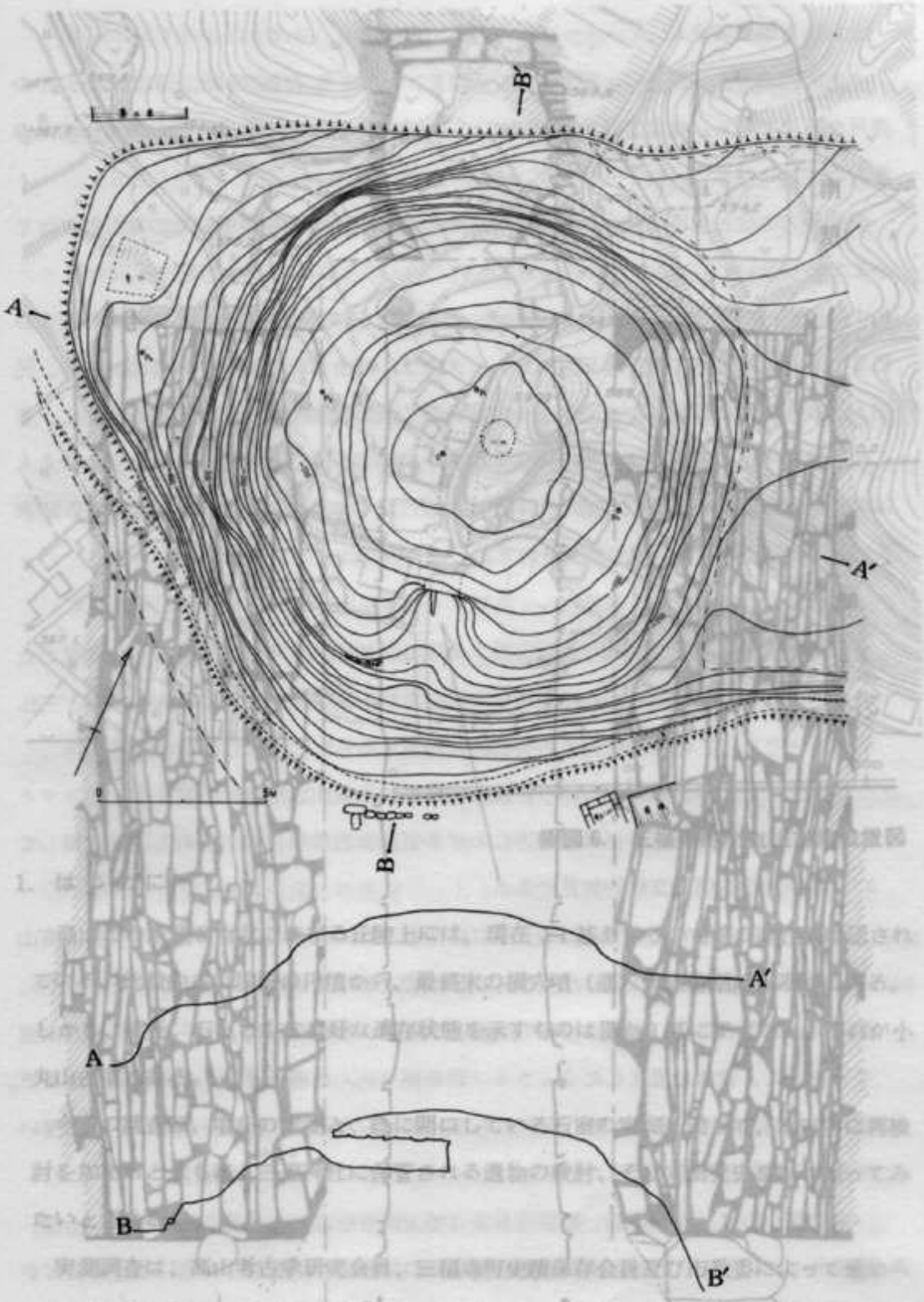
註5.　善応寺遺跡発掘調査報告書　高山市教委1984

註6.　同　　上

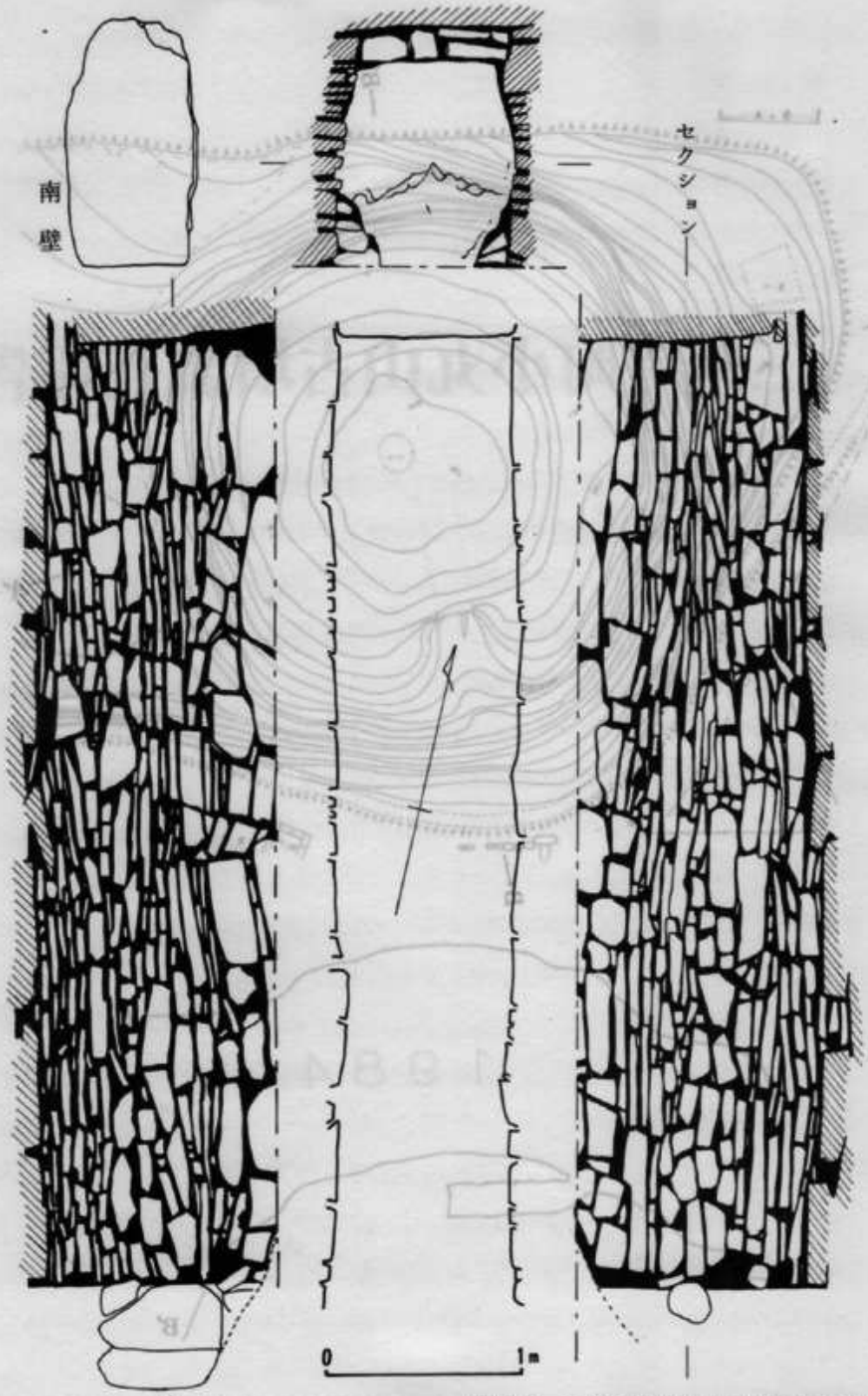
なお本稿の執筆は、2章を石原哲彌、他を吉朝則富が行った。

三福寺町小丸山古墳調査報告

1984



挿図 4.　三福寺町小丸山古墳墳丘平面図 及び 断面図



挿図 5.　三福寺町小丸山古墳石室実測図

挿図 6.　三福寺町小丸山古墳位置図

1. はじめに

高山市の東側を南北にのびる丘陵上には、現在 11 基あまりの古墳の存在が確認されている。比較的古い段階の円墳から、最終末の横穴墳（墓）まで時期差もみせている。しかし、墳丘、石室ともに良好な遺存状態を示すものは僅か1基にすぎない。それが小丸山古墳である。

今回の調査は、墳丘の実測と、既に開口している石室の実測を通して、本古墳に再検討を加えるとともに、三福神社（みさき）に保管される遺物の検討、そして研究史を振り返ってみたいと考える。

実測調査は、高山考古学研究会員、三福寺町史蹟保存会員及び市教委によって進められ、9月24日～12月15日にかけて、日曜日を中心に延人員 43名、7日間を費して完了した。器材は市教委の協力を得た。

2. 小丸山古墳研究史

小丸山古墳の発掘調査は、昭和4年2月11、12日 に実施された。すでに 55 年の歳月が過ぎている。指導者は犬塚行蔵で、三福寺町の蒲弥三吉他 14 名が発掘作業に参加した。

飛騨地方では、指導者立会いのもとで古墳の学術発掘調査を実施したのはこれがはじめてであった。

犬塚行蔵（明治18～昭和12年）は、福岡県京都郡長川の出身である。みつ夫人の郷里である飛騨地方の考古学研究を志し、大正15 年5月に名古屋から高山に転じ、民間人として研究に専念した。昭和7年に病を得て岐阜に転居するまでの約6年間に、多くの研究論考を「飛騨史壇」や「考古学雑誌」に発表した。3回忌にあたり、みつ夫人は角竹喜登に編集を依頼し、昭和14年に「犬塚行蔵飛騨考古学遺稿」を出版した。昭和56年に増訂再版の新訂版が刊行された。

○ 小丸山古墳発掘に至る経過

犬塚行蔵は「大野郡三福寺村の古蹟」と題して、昭和3年11月に10日間にわたって飛騨毎日新聞に発表した。現三福寺町における縄文遺跡、古墳、古代寺院、三仏寺城をとりあげ、地域史に対する啓蒙的な内容であった。

古墳については実地調査により、桧山、井上、小丸山、小池塚、堂ノ前、ケンサキの六基を確認し、三福寺が飛騨地方における有数の古墳所在地であることを主張している。小丸山古墳の文献的初見である。

丁度、連載記事に呼応するかのように、昭和3年12月 11日、斐太中学校の裏山で、運動場拡張工事の土取り作業中に、箕田徳之助等数名によって、まったく偶然に横穴墳が発見された。場所は小字竹ケ鼻字七切で、校庭から約100 米の高所、南面する斜面に、岩盤の風化したリュウモン岩を掘り込んだ奥行き約3米の横穴墳である。羨門を板石で塞ぎ、その外側に長径30～50 ㎝大の川石 138 個を積み、土砂で覆い外部からは隆起も露出もなかった。

玄室部からは、耳付提瓶、短頸壺各1（斐太高校所蔵）と、碧玉製管玉1、金環、銀環各1、刀子1、鉄鏃2（国立博物館蔵）の副葬品が出土した。他に須恵器破片が4個体分出土したが、現在、所在不明で確認できない。

この横穴墳は、6世紀後半からはじまり7世紀中葉にかけて全国各地に盛行した群

集墳に属するものであり、飛騨地方で最初の発見であった。

翌12日には斐太中学校において星野政吉校長の主催により、関係者が集まり保存方法を中心に協議がなされた。

12月28日、三福寺区民によって、原形に復旧する作業と鎮魂祭を実施した。この作業に参加する途中、遠藤清治郎、坪内吉左衛門、都竹与七郎の3名は、山道に2個の川石が露出しているのを発見し、付近を試掘して内部が殆んど土砂で埋っている横穴墳（2号墳）を発見し、犬塚行蔵に通報した。1号墳と同じような形式、規模であったが、副葬品は1点も出土しなかった。

この日、引き続き2号墳の復旧と祭祀を行い、さらに、かって明治29年に石材を取り出すために壊され、直刀や轡など持ち去られたという桧山古墳趾の整理調査にとりかかった。

翌29日、降雪のなかを調査続行し、須恵器片、碧玉製管玉1、メノウ製勾玉1、ガラス小玉2（1個は風化の為破砕）、銀環2、銅環1（三福神社蔵）が出土した。桧山古墳は石室を有する円墳と推定されるが、その規模や石室形態は不明である。

勾玉発見のとき、喜びの余り万歳を三唱したと記録されている。三福寺区民の当時の熱意をうかがうことができる。

かくして、完全な雪どけを待たず、年明けた2月に、いよいよ小丸山古墳の発掘に着手するのであるが、それは郷土愛の勢いとも言うべきものであった。

○　小丸山古墳（第4号墳）の発掘

昭和4年2月、三福寺区民は犬塚行蔵に小丸山古墳の発掘指導と、警察署への了解方を依頼し、11日午後2時から発掘調査に着手した。区内では永久保存をはかり発掘を避けたらという意見もあったようである。（註1）

指　導	犬塚行蔵			
参加者	都竹武平次	蒲　弥三吉	寺境清蔵	矢箆原長右衛門
	遠藤清次郎	森本長太郎	都竹与七郎	都竹与三右エ門
	西本作助	平田喜多郎	山之内喜左エ門	三島長助
	堀之内由之助	坪内弥十郎	門前新六	
位　置	三福寺字城ケ洞小字小丸山1262番地			
所有者	坪内常右衛門			

発掘は翌１２日にかけて実施され、午後３時半原形に復旧し祭祀を執行して終了した。

犬塚行蔵は、小丸山古墳だけ糞尿等の肥料を施すなという伝説があることから、すでに一度発掘されたのではという予感をもっていた。以下「飛騨史壇」８の１０に報告された原文を引用して当時の様子を紹介する。

「・・・・・地下２尺の処から多数の土器の破片が１ケ所に集積埋没してあるのを発見した。棺槨内にあるべき土器類が其場所を離れて無意味な處に破壊埋没されているのは、かって此の墳丘が発掘されて其埋蔵物が取出されたる事を表示するもので、私が勞頭予想したる事を裏書したのである。

夫れから更に２尺を掘りて正しく南北に方位した長１７尺、幅上方約２尺７寸、底部約３尺５寸、深約４尺５寸の石室を発見した。側壁は方１尺前後、厚２.３寸の切石を積重ね、頂上は厚６寸、長４尺２寸、幅２尺１寸、以下大同小異の板石７個を以て之を蓋ひ、更に其間隙には多数の小板石を積重ね、底部には拳大の川石を敷いてあった。玄室及羨道の区別も明瞭ならざる細長き石室で、羨門は南面に開口してあるけれども土砂の為全然埋没されてあった」・・・・・　副葬品・・・・・

銅製耳環　大２、小２、碧玉製管玉　大３、小２、鉄製刀子破片　１個分

鉄製轡破片　３個、石製魚形玩具　２（但し１個はハゼ、１個は小鮒の如き形）

其他多数の人骨の腐蝕したるまま存在しているのを発見し、何とかして完全に取り出したいと百方苦心したけれども、何れもぼろぼろに破砕して原形を留むる事が不可能であった。唯頭部を北にして横臥したる２個の遺骸である事を辛うじて認知する事が出来ただけであった。・・・・・」

特筆すべきは、５、６個の歯牙を発見、須田武一歯科医に年齢鑑定を依頼したことである。鑑定により、若年者であること、１個は１０歳前後であることが判明した。

そして狭い石室への併葬と、石製魚形玩具の存在がそれを裏付けるものと考え、馬具の破片から男児であったのではと推定したのである。

２基の横穴墳の発見と、１基の古墳址の整理調査、及び小丸山古墳の発掘と一連の調査を指導した犬塚行蔵は「飛騨史壇」８の９、８の１０、及び「考古学雑誌」19の３に報告している。

○　その後の経過

昭和４年３月２２日、区民総出で小丸山古墳の復元を行い、南面に羨口をあけ、芝で古墳を覆った。観覧者のため道路の修繕をし、３月２８日には２基の横穴墳、桧山、小丸山古墳に立札を建てた。

筆者も昭和１７年頃、中学校の歴史の時間に小丸山古墳を見学し、レンガ状の側壁と骨壺に満たされた骨片を見て薄気味悪く感じたことを覚えている。

桧山及び小丸山古墳副葬品は一括して、昭和３２年３月８日、市文化財に指定された。

翌年５月には１号墳の斜面に続いた松本町杉ケ洞で、３基目の横穴墳と多くの副葬品が斐太高校によって発掘された。

昭和３４年に石室の蓋石が一度はずされる事があったが、町内役員の方々でもと通りに復元された。

骨片もいつしか滅失し（見学者の持ち去りもあった）、かろうじて石室が原形を保っているという状態であったが、昭和５８年に「三福寺遺跡保存会」が発足して、保存、見直し活動が活発に進められ、今回の再調査となったのである。

3. 位　　置　（地形及び地質）

山頂に三仏寺城址を載く標高６６８米の城山から、西方に延びるいくつかの舌状台地の穴端の一つに小丸山古墳は位置する。地番は三福寺町字城ケ洞小字小丸山１２６２番地である。墳丘の築造は舌状部の中程を切り取って先端部に盛りあげる、いわゆる丘尾切断方法を行っており、従って西方より望むと自然丘部分も築造したかの様な効果をあげている。

周辺は水田及び人家で、丘陵鞍部は畑となっている。

丘陵の地質は、基盤の濃飛リュウモン岩体の上にレキ層とうすい砂層が堆積し、うすい腐植土が表土となっている。

レキ層中にはチャート円礫や石灰岩の小礫を含むが、城山からの崖錐レキとは異なり、古大八賀川系のレキである。これらのレキは、古墳石室の詰石や床面に散見される。

4. 墳　　丘

築成された部分における墳丘の径は、東西約１５ｍ、南北約１６ｍの円形で、墳頂より８０㎝低い位置で段を有し、二段築成となっている。上段の径は約８ｍである。

墳頂の四方、即ち舌状丘陵穴端部は、墳頂より４ｍ低いレベルで台形状に張り出しを

みせているが、人為的なものかどうかは判断し難い。近年までこの部分に墓碑があり、現在は撤去されて方形の穴を残している。

古墳の基底部を巡って小道が東西に走る。築造された実際の墳丘の高さについては、発掘によらねば正確には知り難いが、尾根に続く部分（東部）で2.4mである。南部の人家の庭面から5.3m、西部の墓地址面から4.5m、北部水田面からは約10mで、いずれも地山を含んだ高さであるが、一見、全体が築成された観を呈する。

近年まで墳丘上でウド栽培等の耕作がなされた事、及び昭和4年の犬塚行蔵の調査の際における変容があって、墳丘が原形どおりとは思われないが、犬塚の調査の意図からすれば、むしろその際に旧態に復したとみなす方が事実に近いと思われる。

5. 石　室

石室は長軸を南北に、墳丘中央よりわずかに南寄りに位置する。南部で開口するが、犬塚調査時において既に南壁は失われており、恐らくそれ以前の盗掘による所以と思われる。これがまた、本古墳が横穴式石室であると誤って判断される由縁ともなっている。

石室床面は墳頂より2mでほぼ水平である。石室は南北4.85m、東西0.95mの長方形竪穴式石室で、主軸はN－13°－Wを示す。 東西壁は板状リュウモン岩片の積み重ねによる割石積、北壁及び南壁（註2）はリュウモン岩の板状1枚石である。

天井部はリュウモン岩の板石約14枚でおおわれているが、犬塚調査及び昭和34年の取りはずしによる若干の変容があると思われる。

東西壁は最長1m、平均50～70cmの板状リュウモン岩が綿密に積まれ、下部に比較的大きな石材を使用している。部分的にチャート円礫（10～15cm）が充填されており、ごくまれに石灰岩礫も見られる。ひかえ積みの有無は不明である。

東西壁とも上部に少し傾きをみせ、床面と天井面での幅の差は20cmを測る。床面は小礫混じりの砂質土で、木棺や粘土槨の痕跡は見当らない。床面の土砂を精査する課題を残している。

6. 遺　物　昭和4年の発掘で出土した副葬品

銀環2、　金剥落耳環　大2、小2、碧玉製管玉大3、小2（内1個は白色）

刀子1個分、鉄鏃2、鉄製轡金具1個分、鉸具1、石製魚形玩具2（他に1個）

現存する遺物のうち、石製魚形玩具については人為的な加工の痕跡は全くなく、五章内でも触れた様に、封土中に含まれる石灰岩の自然礫を発掘者が拡大解釈したもののよ

うである（註3）。

副葬品は、桧山出土品と一緒に箱に収められ、三福神社氏子総代によって大切に保管されてきた。鉄製品の銹がひどく防銹処理が必要である。発掘時に2体分の人骨と若年者の歯牙が確認されたが、伴出した須恵器と同様所在不明である。

7. 古墳築造の時期について

飛騨の古墳編年では、5世紀後半の築造と考えられる高山市冬頭王塚が、現在のところ最古である。二段円墳、川原石で構築し粘土を充填した竪穴式石室である。国府町広瀬の亀塚古墳の石室が同様な竪穴式石室で、武具が中心の副葬品であった（註4）。
次が前方後円墳の信包八幡神社古墳で、小口積の竪穴式石室に、金環、玉、鉄鏃、馬具、辻金具が出土して、ほぼ6世紀に位置づけられる。他に板石でレンガ状の石室をもつものでは、古川町五阿弥塚古墳、国府町十王堂古墳などがある。次の段階は高山市岩屋古墳、古川町水上古墳、大洞平古墳、国府町鴻峠口古墳（前方後円墳）、鴻宮古墳などの巨石墳で横穴式石室である。6世紀後半から7世紀に位置づけられよう。最後に前述の三福寺横穴墳が飛騨では7世紀中葉に出現して古墳時代の終末期をむかえる。

小丸山古墳は石室及び副葬品から6世紀はじめ頃の築造と推定されるが、出土した須恵器類が確認出来れば、より正確な時期判定が可能と思われる。

8. ま と め

小丸山古墳の実測調査は、昭和4年の犬塚調査以来実に55年を経過した後になされたのである。これは墳丘、石室の正確な実測図の欠除が動機でもあるが、何よりも、地元の方々の史跡保存に対する関心の高まりに支援される所が大きい。結果として精緻な実測図作製と、犬塚調査に関する適宜な修正、確認がなされ、後世に残される事となったのである。

三福寺町一帯に分布する高山市東部古墳群は、冒頭に述べた様にそのほとんどが壊滅状態にあり、僅かに残された小丸山古墳の保護は、将来に向けての重要な使命である。

またこの調査を機に、同地内の未発掘の古墳や横穴墳存在の想定される場所に対する細心の注意が換起されるならば、望外の喜びである。

末筆ながら本調査に御協力下さった多くの方々、とりわけ三福寺町史跡保存会の皆様には深甚の謝意を表するものである。

註1　犬塚行蔵　「三福寺の古墳と古墳」ガリ版刷冊子

註2　南壁の石材は一時持ち去られていたが、現在は戻されている。

註3　「小丸山古墳調査聞取覚書」石原哲彌
どっこいし　17号　昭和59年

註4　岡村利平　「飛州　31号」明治28年(1895)

なお本稿の執筆は、2. 6. 7.を石原哲彌、1. 3. 4. 5. 8を吉朝則富が行った。

調査参加者氏名

〔高山考古学研究会〕

石原哲彌　藤本健三　野村宗作
垣水富郎　輪方勝美　吉朝則富
丸山和雄　板津忠夫　中田敬三
都竹昭雄　菅田一衛　坂下克巳
西二夫　牛丸昭二　山腰哲也
中島和之

〔三福寺町史跡保存会〕

代表　三島長一

〔市教委〕

社会教育課

1. 西之一色町岩屋古墳　遠景

2. 全　景

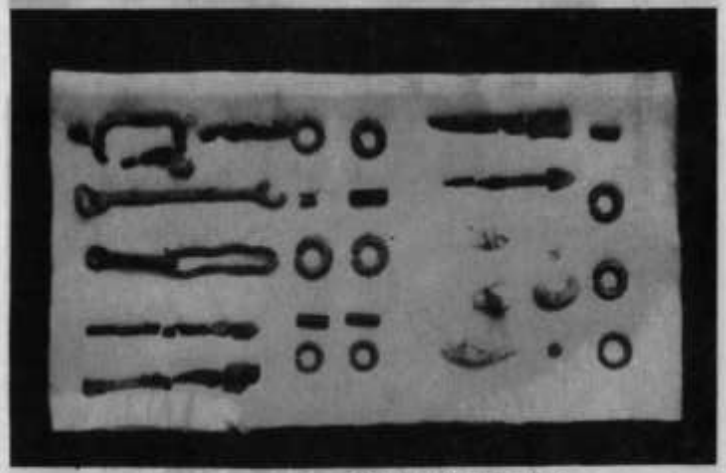
3. 石室正面

4. 羨道より玄室を見る

5. 三福寺小丸山古墳全景

6. 石室南壁部（開口）

7. 石室内部



8. 高山市指定文化財
「桧山及び小丸山古墳副葬品」

西之一色町岩屋古墳
三福寺町小丸山古墳
調査報告書

昭和60年3月 発行

編集　高山考古学研究会
発行　高山市教育委員会
印刷　飛　騨　印　刷